



TITLE:

# Separability cone and its dual cone (Operator monotone functions and related topics)

AUTHOR(S):

安藤, 毅

---

CITATION:

安藤, 毅. Separability cone and its dual cone (Operator monotone functions and related topics). 数理解析研究所講究録 2014, 1893: 84-88

ISSUE DATE:

2014-05

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/195821>

RIGHT:

# Separability cone and its dual cone

北海道大学（名誉教授） 安藤 毅 (Tsuyoshi Ando)

Hokkaido University (Emeritus)

Email: ando@es.hokudai.ac.jp

**1. Introduction.** この講演は解説的な性質のものである.  $\mathbb{M}_k$  は  $k \times k$  複素行列の空間とする. これは自然な内積  $\langle \cdot, \cdot \rangle$  で Hilbert 空間になる. その norm を  $\|\cdot\|_2$  で表す.  $\mathbb{M}_k$  の positive semi-definite matrix の なす cone を  $\mathbb{M}_k^+$  で表す.

この講演の主題は tensor 積  $\mathbb{M}_m \otimes \mathbb{M}_n$  であるが, 簡単のため  $m = n$  の場合のみを考察することとする.

$\mathbb{M}_n \otimes \mathbb{M}_n$  には幾つかの自然な同一視がある:  $A = [\alpha_{j,k}], B = [\beta_{j,k}] \in \mathbb{M}_n$  に対して

$$\begin{aligned}\mathbb{M}_n \otimes \mathbb{M}_n &\sim \mathbb{M}_n(\mathbb{M}_n) \sim \mathbb{M}_{n^2} \\ A \otimes B &\sim [\alpha_{j,k} B]_{j,k} \sim [\alpha_{j,k} \beta_{p,q}]_{j,p;k,q}.\end{aligned}$$

ここで  $\mathbb{M}_n(\mathbb{M}_n)$  は  $n \times n$  matrix を entry にもつ  $n \times n$  block-matrix の空間である.

重要なのは, この同一視の下で  $A, B \in \mathbb{M}_n^+ \implies A \otimes B \in \mathbb{M}_{n^2}^+$  なる事実である. この事実の下に 3 つの cone を  $\mathbb{M}_n \otimes \mathbb{M}_n$  に導入しよう.

$$\mathfrak{P}_0 := \mathbb{M}_{n^2}^+, \quad \mathfrak{P}_+ := \text{Conv}(\mathbb{M}_n^+ \otimes \mathbb{M}_n^+), \quad \mathfrak{P}_- := \text{dual cone of } \mathfrak{P}_+.$$

すなわち  $\mathbf{T} \in \mathfrak{P}_- \stackrel{\text{def}}{\iff} \mathbf{T} = \mathbf{T}^*, \langle \mathbf{T} | \mathbf{S} \rangle \geq 0 \quad \forall \mathbf{S} \in \mathfrak{P}_+.$

明らかに

$$\mathfrak{P}_+ \subset \mathfrak{P}_0 \subset \mathfrak{P}_-$$

であり,  $\mathfrak{P}_+$  は  $\mathfrak{P}_-$  の dual cone になり,  $\mathfrak{P}_0$  は selfdual である.

Matrix  $\mathbf{T} \in \mathfrak{P}_0$  が  $\mathfrak{P}_+$  に属するとき  $\mathbf{T}$  は *separable* であると言い, そうでないときは *entangled* と言われる. すなわち  $\mathbf{T}$  が separable とは

$$\mathbf{T} = \sum_p A_p \otimes B_p \quad \exists A_p, B_p \in \mathbb{M}_n^+$$

のことである.  $\mathfrak{P}_+$  を *separability cone* と呼ぼう.

$\mathbb{M}_n$  の linear map の空間  $\mathfrak{L}(\mathbb{M}_n)$  も以下の対応で  $\mathbb{M}_n(\mathbb{M}_n)$  と同一視される:

$$\mathfrak{L}(\mathbb{M}_n) \ni \Phi \sim \mathbf{C}_\Phi := [\Phi(E_{j,k})]_{j,k} \in \mathbb{M}_n(\mathbb{M}_n).$$

ここで  $E_{j,k}$  ( $j, k = 1, 2, \dots, n$ ) は  $\mathbb{M}_n$  の *matrix unit* である. すなわち  $\mathbb{C}^n$  の canonical O.N. 系  $e_j$  ( $j = 1, 2, \dots, n$ ) を使って  $E_{j,k} = e_j e_k^*$  と書かれる. ここで注意するのは, vector  $x, y \in \mathbb{C}^n$  は column vector として扱う. したがって  $\langle y | x \rangle = y^* x$  であるが,  $xy^*$  は

$\mathbb{M}_n$  の元である. この同一視の下での  $\mathfrak{L}(\mathbb{M}_n)$  の norm は Hilbert-Schmidt norm になる. この block-matrix  $\mathbf{C}_\Phi$  を linear map  $\Phi$  の *Choi matrix* と呼ぶ.

Linear map  $\Phi$  の *positivity* は  $\Phi(\mathbb{M}_n^+) \subset \mathbb{M}_n^+$  で定義される最も familiar なものである.  $\Phi$  の *completely positivity* はよく知られた概念である. 更に  $\Phi$  が *super-positive* とは

$$\Phi(X) = \sum_p \langle A_p | X \rangle \cdot B_p \quad \exists A_p, B_p \in \mathbb{M}_n^+$$

の事とする. これら 3 つの positivity と上に導入した 3 つの cone の間には, Choi matrix を介して, 以下のような対応がある:

$$\begin{aligned} \Phi \text{ super-positive} &\iff \mathbf{C}_\Phi \in \mathfrak{P}_+, \\ \Phi \text{ completely positive} &\iff \mathbf{C}_\Phi \in \mathfrak{P}_0, \\ \Phi \text{ positive} &\iff \mathbf{C}_\Phi \in \mathfrak{P}_-. \end{aligned}$$

ここで completely positive と cone  $\mathfrak{P}_0$  の対応は本当は深い結果で Choi [1] による.

$\mathbf{E} := [E_{j,k}]_{j,k}$  および  $\mathbf{I} := I_n \otimes I_n$  (identity matrix) と書くと,  $\mathbf{E}$  は identity map  $X \mapsto X$  の Choi matrix であり,  $\mathbf{I}$  は linear map  $X \mapsto \text{Tr}(X) \cdot I_n$  の Choi matrix となっている. 明らかに  $\mathbf{E} \in \mathfrak{P}_0$  で  $\mathbf{I} \in \mathfrak{P}_+$  である.

Linear map  $\Phi$  の positivity は明快な概念なのに, cone  $\mathfrak{P}_-$  は漠然とした印象しか与えない. 以下では  $\mathfrak{P}_-$  に注視して行く. 2 つの linear map の composition に関する次ぎの Lemma は trivial なものであるが, 使い方によっては役に立つ.

**Lemma 1.**

- (i)  $\Phi, \Psi$  positive  $\implies \Psi \circ \Phi$  positive.
- (ii)  $\Phi$  super-positive,  $\Psi$  positive  $\implies \Psi \circ \Phi, \Phi \circ \Psi$  super-positive.

Linear map の super-positivity の判定は一般に困難であるが, 次が有用である.

**Lemma 2.** (Horodecki's [3])  $\Phi$  が positive のとき

$$\Phi \text{ super-positive} \iff \Psi \circ \Phi \text{ completely positive} \quad \forall \text{ positive } \Psi$$

これを使うと  $\mathbf{I}$  の  $\|\cdot\|_2 \leq 1$  の近傍にあるものがすべて separable であることが判る:

**Theorem 3.** (L. Gurvits and H. Harnum [2])  $\mathbf{T} = \mathbf{T}^*, \|\mathbf{T}\|_2 \leq 1 \implies \mathbf{I} + \mathbf{T} \in \mathfrak{P}_+.$

**§2. Properties of the cone  $\mathfrak{P}_-$ .**  $\mathbf{T} = \mathbf{T}^*$  なものが  $\mathfrak{P}_0$  に属するかどうかは eigenvalue だけで決まってしまうが,  $\mathfrak{P}_-$  に属するものの特性は余り明らかでない. 次ぎは Theorem 3 の dual form である.

**Theorem 4.**  $\mathbf{T} \in \mathfrak{P}_- \implies \text{Tr}(\mathbf{T}) \geq \|\mathbf{T}\|_2.$

Ortho-projection  $\mathbf{P}$  に対して  $\mathbf{P} \in \mathfrak{P}_+$  であることと  $\mathbf{P}^\perp := \mathbf{I} - \mathbf{P} \in \mathfrak{P}_+$  であることは同値ではない. しかし Theorem 3 から次ぎ出る.

**Theorem 5.** Ortho-projection  $\mathbf{P}$ ,  $\text{rank}(\mathbf{P}) = 1 \implies \mathbf{P}^\perp \in \mathfrak{P}_+$ .

$\mathbb{M}_n$  での transposition map  $X \mapsto X^T$  は明らかに positive である. Linear map  $\Phi \in \mathfrak{L}(\mathbb{M}_n)$  の Choi matrix が  $\mathbf{T} = [T_{j,k}]_{j,k}$  であるとき, linear map  $X \mapsto \Phi(X^T)$  の Choi matrix は  $[T_{k,j}]_{j,k}$  すなわち  $(j,k)$ -block-entry を  $(k,j)$ -block-entry に入れ替えたものになる.  $\mathbb{M}_n(\mathbb{M}_n)$  でのこの対応を  $\mathbf{T}^T$  と書き *partial transpose* と呼ぼう.  $(A \otimes B)^T = A^T \otimes B^T$  であるから,  $\mathfrak{P}_+^T \subset \mathfrak{P}_+$  およびその dual として  $\mathfrak{P}_- \subset \mathfrak{P}_-^T$  となるが,  $\mathfrak{P}_0^T \not\subset \mathfrak{P}_0$  である. たとえば  $\mathbf{E} \in \mathfrak{P}_0$  であるが,  $\mathbf{E}^T \notin \mathfrak{P}_0$  である.

$\mathbf{I}$  と  $\mathbf{E}$  に関連する matrix の eigenvalue を調べてみよう:

$$\begin{aligned} \mathbf{E} \in \mathfrak{P}_0 & \quad \sigma(\mathbf{E}) = \{n, \overbrace{0, \dots, 0}^{n^2-1}\}, \\ \mathbf{E}^T \in \mathfrak{P}_- & \quad \sigma(\mathbf{E}^T) = \{\overbrace{1, \dots, 1}^{\frac{n(n+1)}{2}}, \overbrace{-1, \dots, -1}^{\frac{n(n-1)}{2}}\}, \\ \mathbf{I} - \mathbf{E} \in \mathfrak{P}_- & \quad \sigma(\mathbf{I} - \mathbf{E}) = \{\overbrace{1, \dots, 1}^{n^2-1}, -(n-1)\}, \\ \mathbf{I} - \mathbf{E}^T \in \mathfrak{P}_0 & \quad \sigma(\mathbf{I} - \mathbf{E}^T) = \{\overbrace{2, \dots, 2}^{\frac{n(n-1)}{2}}, \overbrace{0, \dots, 0}^{\frac{n(n+1)}{2}}\}. \end{aligned}$$

具体的な matrix の separability に関しては Lemma 2 を利用することが出来ず, より深い考察が必要になる.

**Theorem 6.** (A.O. Pittinger and M.H. Rubin [4])  $\mathbf{I} + \mathbf{E} \in \mathfrak{P}_+$  で  $\mathbf{I} - \mathbf{E} \in \mathfrak{P}_-$ .

これを応用するために *partial trace map*  $\varphi_i(\cdot)$   $i = 1, 2$  を考えよう.  $\mathbb{M}_n \ni X \mapsto X \otimes I_n \in \mathbb{M}_n \otimes \mathbb{M}_n$  は positive linear map であるので, その adjoint map を  $\varphi_1(\cdot)$  と書くと, これは  $\mathbb{M}_n \otimes \mathbb{M}_n$  から  $\mathbb{M}_n$  への positive linear map になり

$$\langle X \otimes I_n | \mathbf{T} \rangle = \langle X | \varphi_1(\mathbf{T}) \rangle \quad \forall X \in \mathbb{M}_n, \mathbf{T} \in \mathbb{M}_n \otimes \mathbb{M}_n$$

で特徴付けられる. 同様に *partial trace map*  $\varphi_2(\cdot)$  は

$$\langle I_n \otimes Y | \mathbf{T} \rangle = \langle Y | \varphi_2(\mathbf{T}) \rangle \quad \forall Y \in \mathbb{M}_n, \mathbf{T} \in \mathbb{M}_n \otimes \mathbb{M}_n$$

で特徴付けられる  $\mathbb{M}_n \otimes \mathbb{M}_n$  から  $\mathbb{M}_n$  への positive linear map である.

$\mathbf{I} + \mathbf{E}$  は linear map  $\Phi(X) := \text{Tr}(X) \cdot I_n + X$  の Choi matrix である. Theorem 6 によりこれは super-positive である. この  $\Phi$  に Choi matrix が  $\mathbf{T}$  である positive map  $\Psi(\cdot)$  を左から compose すると, その Choi matrix は  $\varphi_1(\mathbf{T}) \otimes I_n + \mathbf{T}$ , また右から compose するとその Choi matrix は  $\varphi_2(\mathbf{T}) \otimes I_n + \mathbf{T}$  となる. しががって Lemma 1 を使うと Theorem 6 から次ぎがでる.

**Theorem 7.**

$$\mathbf{T} \in \mathfrak{P}_- \implies \begin{cases} \varphi_1(\mathbf{T}) \otimes I_n + \mathbf{T} \in \mathfrak{P}_+ & \text{and} & I_n \otimes \varphi_2(\mathbf{T}) \otimes I_n + \mathbf{T} \in \mathfrak{P}_+, \\ \varphi_1(\mathbf{T}) \otimes I_n - \mathbf{T} \in \mathfrak{P}_- & \text{and} & I_n \otimes \varphi_2(\mathbf{T}) \otimes I_n - \mathbf{T} \in \mathfrak{P}_-. \end{cases}$$

Separability の定義から

$$T \in \mathfrak{P}_+ \implies \begin{cases} \varphi_1(T) \otimes I_n - T \in \mathfrak{P}_+, \\ I_n \otimes \varphi_2(T) - T \in \mathfrak{P}_+ \end{cases}$$

は明らかであるが, 一般には

$$T \in \mathfrak{P}_0 \not\Rightarrow \begin{cases} \varphi_1(T) \otimes I_n - T \in \mathfrak{P}_0, \\ I_n \otimes \varphi_2(T) - T \in \mathfrak{P}_0 \end{cases}$$

である. しかし

$$T \in \mathfrak{P}_0, T^T \in \mathfrak{P}_0 \implies \begin{cases} \varphi_1(T) \otimes I_n - T \in \mathfrak{P}_0, \\ I_n \otimes \varphi_2(T) - T \in \mathfrak{P}_0 \end{cases}$$

が判る.

§3.  $\mathfrak{P}_+$ -best approximant.  $T = T^* \in M_n \otimes M_n$  にたいして

$$\|S_0 - T\|_2 = \inf_{S \in \mathfrak{P}_0} \|S - T\|_2$$

となる  $S_0 \in \mathfrak{P}_0$  は unique に定まる. 実際  $S_0 = T^+$  (positive part) であり

$$T = S_0 - (T - S_0)$$

は  $T$  の Jordan 分解となる. このとき  $S_0$  は  $T$  の spectre 分解から直接得られる.

ここで cone  $\mathfrak{P}_0$  を separability cone  $\mathfrak{P}_+$  に変えたときも

$$\|S_0 - T\|_2 = \inf_{S \in \mathfrak{P}_+} \|S - T\|_2$$

となる  $S_0 \in \mathfrak{P}_+$  が unique に定まる. これを  $T$  の  $\mathfrak{P}_+$ -best approximant と呼ぶこととする.  $S_0$  が  $T$  の  $\mathfrak{P}_+$ -best approximant のときは  $T^T$  の  $\mathfrak{P}_+$ -best approximant は  $S_0^T$  となることは明らかである.

Best approximation の一般論から次ぎが知られる.

**Lemma 8.**  $S_0$  が  $T$  の  $\mathfrak{P}_+$ -best approximant となる必要充分条件は

$$S_0 - T \in \mathfrak{P}_- \quad \text{and} \quad \langle S_0 - T | S_0 \rangle = 0.$$

$T$  の  $\mathfrak{P}_+$ -best approximant を実際に決定することは困難であるが, Theorem 6 と Lemma 8 を使うと次ぎが知られる.

**Theorem 9.**

- (i)  $E$  の  $\mathfrak{P}_+$ -best approximant は  $\frac{1}{2}(I + E)$  である.
- (ii)  $I - E$  の  $\mathfrak{P}_+$ -best approximant は  $I - \frac{1}{n}E$  である.

## 参考文献

- [1] M.D. Choi, *Completely positive linear maps on complex matrices*, Linear Alg. Appl., 10(1975), 285–290.
- [2] L. Gurvits and H. Barnum, *Largest separable ball around the maximally mixed bipartite quantum system*, arXiv:quant-ph/021159v2, 10 Dec. 2002.
- [3] M. Horodecki, P. Horodecki and R. Horodecki, *Separability of mixed states; necessary and sufficient conditions*, Phys. Letter A223 (1996), no. 1-2, 1–8.
- [4] A.O. Pittinger and M.H. Rubin, *Note on separability of the Werner states in arbitrary dimensions*, Optics Comm., 179(200), 447–449.